

平成27年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成27年4月～平成28年3月

1. 学校概要

学校名 掛川市立北中学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 中高一貫教育 高等学校
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

所在地 〒436-0342
 静岡県掛川市上西郷220番地の2

E-mail office@kita.kakegawa-net.jp

Website

児童生徒数 男子 264名 女子 211名 合計 475名
 児童・生徒の年齢 13歳～15歳

2. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

3. 活動内容

1 研究項目

ESDの視点に基づく環境教育の実践に向けて
(Education for Sustainable Development)

2 研究目的

平成26年12月に環境省主催の環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修に参加した。その時にある研修講師から言われた「従来の環境教育で、環境問題は解決に向けて前進しているのか。」という言葉が強く印象に残っている。よくテレビや本で地球温暖化やオゾン層の破壊といった環境問題について知ると危機感を覚えるが、だからと言って、学校全体でその問題に対処しようと継続的に行動できているかというところではない。

本校は平成26年度からユネスコスクール加盟に向けて動き出した。国際理解と環境教育を軸に双方のこれまでの活動をさらに活発化させるべきであったが、研修を通して私は本校は環境教育に特に力を入れていく必要があると感じた。“ユネスコスクールはESDの推進拠点”と文部科学省やユネスコ国内委員会が定義づけているように、ESD（持続可能な開発のための教育）の概念を取り入れた環境教育の実践を進んで行っていくことが大切である。そのため、私は研修で学んだESDやユネスコスクールとしての使命を他の教員に共有し、環境教育を一分掌にとどめることなく全校体制で力をいれていきたいと考えた。また平成27年度はユネスコスクール登録に伴い、ESDの視点に基づく環境教育の実践を追究してきたので、テーマをこのように設定した。

3 研修方法

(1) 生徒会活動の活発化を図る。

①常時活動をESDの視点でみなおす。

②地域やNPO等との連携を強化する。

(2) 本校独自の環境教育の実践を行う。

①環境教育とかけがわ道德を連携させる。

②問題解決型学習を取り入れる。

③具体的な行動を教科の授業へとつなげる。

4 研究経過

(1) 生徒会活動の活発化を図る。

①常時活動をESDの視点でとらえる。

本校は、エコキャップ回収運動とリサイクル活動に特に力を入れて取り組んでいる。しかし、これら2つの活動を行う理由が生徒に理解されていなかったため、活動をスタートさせる前に、ESDの視点から見直す機会を設けた。

ESDの考えの一つに、活動の質をあげることが持続可能な社会へとつながっていくとある。つまり、環境教育の活動をただの活動で終わらせないように、活動の目的や活動を通して得られる結果を明確にする必要があった。そのため、4月の全校集会では、キャップの回収がワクチンの購入や給食の支給へつながることやリサイクルを行うことが森林伐採を軽減すること等を伝え、活動の価値を全生徒で捉えなおした。

この結果、積極的に活動に参加する生徒が多くなった。福祉委員は、エコキャップ回収運動を活発化させるため、多くキャップを持ってきた生徒やクラスの表彰や呼びかけを行った。

②地域やNPO等との連携を強化する。

地域の方々とは主に2つの活動を行った。6月に行った花壇整備では、緑化委員がボランティアの方々とのコミュニケーションを楽しむだけでなく、苗の植え方から水のかけ方まで教えてもらうことができた。また12月に行った門松作りは、地域の竹や草花を使用して地域の方々と協力して制作し、生徒の喜ぶ姿を見ることができた。

次に、外部との連携として、NPO法人「時ノ寿の森クラブ」の方々と良い関係を築くことが出来た。(資料4)6月に「時ノ寿の森クラブ」から学校林の木の切り株を調達し展示したことで、生徒は木の良さを実感することができた。また12月も7メートルのスギの木を調達し、クリスマスツリーとして校内に設置した。他にも、11月に緑化、ユネスコ、福祉委員が「時ノ寿の森クラブ」が主催する中東遠総合医療センターの下草刈り活動に参加した。

地域の方々やNPOとの活動が増えたことで、生徒が外に目を向けることができ、持続可能な地域づくりに貢献しなければならないと認識することが出来た。

(2)本校独自の環境教育の実践を行う。

①環境教育とかけがわ道德を連携させる。

ユネスコスクール加盟に伴い、より環境教育の推進をしていくため、まずは身近なものを題材にしようと「学校林」を取り上げた。

平成26年度に冀北学舎と岡田良一郎を題材とするかけがわ道德の授業を行った。その時に学校林についても紹介している。本校は学校林を所有する特異の学校であり、その誇りを持つべきだと考える。以前は全校生徒が学校林へ足を運び、学校林見学会や下草刈り活動を行うほど関わりをもっていたが、現在はそういった活動もない。(資料6)そこで、かけがわ道德と環境教育を連携させ、双方から「学校林」を扱うことが出来れば、生徒が学校林の価値を多面的に捉えることができる考えた。

11月の道德の授業で、岡田良一郎と学校林の関係や学校林の歴史について学習し、学校林の良さに気づくことができた。また、学校林が抱える問題も知ることができ、自分たちが学校林を守っていかなければいけないという危機感から、自分たちが実行できることを考えることが出来た。

「学校林」を題材にしたことにより、かけがわ道德で重要視している報徳の教えが環境教育と結びついた実践になった。

②問題解決型学習を取り入れる。

ESDの学習方法に問題解決型学習がある。問題発見から解決までの一貫した授業実践が、様々なスキルを身につけた人材育成へとつながるという考え方である。そこで、「学校林」を題材とした環境教育を問題解決型学習のプロセスを踏むように構成した。

まず、かけがわ道德で岡田良一郎を取り上げ、冀北学舎と学校林について触れ、本校が学校林を所有していることをもう一度意識づけた。(関心の喚起)次に、6月に道德の授業で『WOOD JOB』という映画を鑑賞した。生徒は林業や林業に携わる人々の苦労や思いを知った。他にも、7月に「時ノ寿の森クラブ」の松浦成夫さんの講話で、日本や地域が抱える環境問題や時ノ寿の森クラブの取組について学び、8月には委員会主体で学校林散策に出かけ、学校林の歴史や森林

のあるべき姿を聞いた。(理解の深化)そして、11月の道德の授業で、学校林を守っていくために私達ができることは何かを考えた。(思考力・洞察力等のスキルの育成)その話し合いを生かし、生徒会活動やPTA活動等で環境への取組を行った。(具体的な行動)

このようなプロセスを踏んだことで、生徒の意識が少しずつ変化した。林業従事者に対する見方や学校林に対する考え方が変わり、学校林や地域が抱える環境問題を自分たちのこととして捉え、行動に移すことが出来た。

③具体的な行動を教科の授業へとつなげる。

問題解決型学習の最後のプロセス、具体的な行動を教科の授業へとつなげることが出来た。技術・家庭科では、学校林のスギやヒノキの木を用いて、現在ベンチ作りを行っている。11月の道德の授業で、学校林を管理維持していくためには間伐を行わなければならないことを聞き、「間伐した木を無駄にたくない」「何か活用方法はないか」と生徒が考え、ベンチ作りを提案した。

間伐しなければいけない現状を知り、その解決策を生徒が主体的に考え実践に移すことができた。これは問題解決型学習の成果であると考えられる。

5 研究成果

(1) 成果

①学校全体で環境教育の意識が高まった。

②掛川市で取り組んでいる学園化構想に基づき、地域の人材の活用やボランティアの方々との協力が出来た。

(2) 課題

①エコキャップ回収運動やリサイクル活動だけでなく、その他の活動もESDの視点で捉えなおす必要がある。

②生徒がより主体的に活動を行えるように手立てを考えていく。また、そのための年間指導計画を作成する。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（

）